

校内支援体制の在り方

－校内委員会の立ち上げに向けて－

河合町立河合第一中学校 教諭 平岡 彰 代

Hiraoka Akiyo

要 旨

特別支援教育の推進に向けて、各校で特別な教育的支援を必要とする児童生徒の校内支援体制の在り方について論議がなされつつある。置籍校でも、この校内委員会を立ち上げていく過程においては、いくつかの課題がある。しかし、特別な教育的支援を必要とする生徒への実践を通して、周囲の教員の理解を得て、校内の特別支援教育への意識が徐除に変化してきた。それを基盤として、今後の置籍校での校内支援体制の立ち上げの課題克服について研究した。

キーワード：特別支援教育、特別支援教育コーディネーター、校内支援体制

1 はじめに

平成16年1月、「小・中学校におけるLD（学習障害）、ADHD（注意欠陥／多動性障害）、高機能自閉症の児童生徒への教育的支援体制の整備のためのガイドライン（試案）」が文部科学省から出されたが、その中で校内支援体制の構築について次のように示されている。

「校内の支援体制を確立するに当たっては、系統的な支援を行うための組織と仕組みを構築する必要がある。具体的には、次のような体制の構築を目指す。

○校内委員会を設置して、校内全体で支援する体制を整備する。

○特別支援教育コーディネーターを指名し、校内の教職員や校外の専門家・関係機関との連絡調整に当たる仕組みを整備する。

○当該学級の学級担任だけでなく、同学年の担当教員、専科担当教員、その他チームティーチング担当教員、少人数指導担当教員等、学校内外の人材を活用して個別や小集団での指導體制を整備する。

（以下略）」

これを実現するための置籍校の現状は、学級数・生徒数の少ない小規模校であり、教員が少なく、校務分掌が多忙となっているため、新しい委員会をつくっても形骸化のおそれがあると考えられる。

そこで校内委員会の立ち上げの前に、筆者が具体的に生徒に支援を行い、その成果から、周囲の教員の理解を得て、校内委員会の必要性を説いた。

2 研究目的

校内委員会の立ち上げに向けて、特別支援教育コーディネーターとしての役割として、担任及び教職員の相互理解のための啓発活動及び教材・教具の開発について研究する。

3 研究方法

- (1) 特別な教育的支援を必要とする生徒の調査研究
- (2) 事例研究
- (3) 校内支援体制作りのための考察

4 研究内容

- (1) 特別支援教育推進に向けての昨年度の取組
昨年度、特別支援教育に向けての取組として、「障がい児学級」から「特別支援教室」へと名称変更を行った。
- (2) 本年度の取組
 - ア 「LD、ADHD、高機能自閉症等の基礎知識と支援の視点について」の研修会の実施
上記の内容について、8月に校内研修会の講師をした。研修後、ADHD傾向のある生徒を担当している教員からは、「よく分かった」との感想が出ていた。
 - イ 特別な教育的支援が必要であると思われる生徒についてのアンケートの実施
研修会の内容を踏まえ、9月に上記のアンケートを実施した。すると2年生に数名、3年生に1名いることが分かった。特別な教育的支援が必要な生徒への気付きをさらに促すため、チェックリスト（表1）で点数を付けて評価するものと、学習面、行動面で担任が感じていることを記入する用紙（表2）を、アンケートからあがってきた人数分を配布し、調査した。

表1 チェックリスト

チェックリスト I 「聞く」	3	2	1	0
・聞き間違いがある。「知った」を「行った」と聞き間違える。				
・聞き漏らしがある。				
・個別に言われると聞き取れるが、集団場面では難しい。				
・指示の理解が難しい。				
・話し合いが難しい（話し合いの流れが理解できず、ついていけない）。				
小計				
~~~~~				
(以下略)				

注) 3：非常にしばしばある、2：しばしばある、1：ときどきある、0：ない、もしくはほとんどない

表2 学校での様子の記入用紙

学校での様子（担任、教科担当、他の担当者など）
1 学習面での様子



である。

## (2) 生徒B (男子)

視線が合いにくい、行動にぎこちない面がある、会話に不自然な言い回しがある、授業中の立ち歩きという実態がある。また、職場体験のレポートはインターネットの画面に出てきたそのままを書くというような様子があった。また、担任から聞いた保護者の情報では、3歳まで言葉が出ておらず、その後もうまく表現できていなかったのも、いじめられていたということであった。学力的には問題はないが、チェックリストでは、「対人関係やこだわり等」の項目の点数が高く、対人関係に支援を要すると考えられる。

支援の方針として、言葉を字義通りに解釈し、コミュニケーション面でつまづくことから、言葉の多様な表現を知るため、学級活動の中で、慣用句で表現する取組(表3)を考えた。

また、個別の対応としては、場面に応じた言葉の獲得を目指して、ソーシャルスキルトレーニングをするなどの取組が有効になる。ソーシャルスキルトレーニングの場面は、実際にB児が困っている場面をピックアップして取り組む予定である。

表3 慣用句で表現する取組の例

(ねらい) 日本語には、相手に対して傷つけないような言い回しなどがある。そしてそのような言葉の使い方を学ぶことによって、コミュニケーションを円滑にしていくようにする。

また一方で、そのような使い方ができず、字義通りに言葉をとらえる人もいることも伝える中で、そのような人たちとのコミュニケーションをする時の配慮も考える。

①慣用句とは、二つ以上の語句が結び付いて本来の語句の意味とは別の新しい意味を表す言葉で、からだに関するものが多い。そこで目、鼻、口、耳、頭等の慣用句を各自で出させ、それらの意味を班で考えさせる。

(ポイント) 本来の語句の意味とは違うことを確認させる。

②日本語の使い方で特に関西の言葉の言い回しに、知らなければ分からないものがあることを伝える。(例: 考えときます。→ことわりの言葉)

(ポイント) 言葉を工夫することで、コミュニケーションがうまくできることをつかませる。

③実際には、このようなとらえ方ができず、字義通りにとらえる人もいるが、その人とのコミュニケーションの仕方も考えさせる。

## (3) 生徒C (男子)

国語では、手紙の住所と宛名を逆に書いたり、漢字の形が整わなかったり、自分の名前の漢字も正しく書けなかったりということがあった。英語では、構文は理解できているものの、単語がなかなか覚えられない。思うように学習が進まないことについて「いくらがんばっても、自分は覚えられない」と担任の前で涙ぐんでいる場面もあった。チェックリストの中では、「聞く」「話す」「読む」「書く」「計算する」「推論する」のどの項目も点数が高く、その中でも特に「書く」の項目が高いということがあった。視知覚に何らかの弱さがあるのではないかと考えられる。

支援の方針としては、個別の支援を中心に、漢字の構成の学習や英単語の文字の違いが分かるようになる学習(表4)など、学習面のフォローアップを行う。本校が毎月曜日に行っている「き

らめき教室」で補充時間を確保し、支援を行っている。

表4 指導案の例（部分）

実態（目標）	支援の手だて	評価
漢字の構成が分かる	（個別） 漢字練習用のマス目のあるものを使って、練習する。 部首の学習・・・足りない部首をうめる。 （例） <div style="text-align: center; font-size: 2em;">             秋                      □火           </div> 組み合わせカードを作る。 （例）                      禾 + 火	
文字の違いが分かる	（個別） 間違えやすい文字は、一画ずつ色分けして書き方を提示する。 （例） <div style="text-align: center;">             dの                      c部分を赤、lの部分を青           </div>	
教科書の文字（活字体）と板書やノートの文字の違いが分かる	（個別） <div style="text-align: center; font-size: 1.5em;">             a と a                      g と g           </div>	
つづりの細部を意識する	（学級） 単語を語尾から1文字ずつ見せて、その単語を答えさせる。	

高橋あつ子編著 「LD、ADHDなどの子どもへの場面別サポートガイド」ほんの森出版より引用

## 6 研究の結果と考察

支援はまだ始まったばかりだが、他の教員からも「教材を使ってみたい」、「相談にのって欲しい」などの要望も出てきている。第1学年でも、様々な生徒にソーシャルスキルトレーニングを学級活動や道徳の時間に行うなど、特別な教育的支援が必要な生徒のみならず、少しずつ広がりを見せ始めている。（表5）本校では、会議や打合せの時間がもちにくい実状があるが、特別支援教育コーディネーターとして日頃から生徒を把握して、個々の担任への細かな支援を心がけていくことや、全学年会議への出席をして、生徒の様子を報告し合ったり、理解啓発の資料の提供、研修会の企画、関係諸機関との連携の窓口となることが、校内支援体制の構築へとつながると考える。

表5 ソーシャルスキルトレーニングの指導案

1年 学級活動指導案

S先生のお話から、「いじめ」をされた人の気持ち、した人の気持ちを考えることに焦点をおく。

SSTカード（クリエーションアカデミー 本田恵子監修より引用）

対立の解消

指導のポイント

- ・それぞれが自分らしい意見や、やり方をもってOK



対立は自然なこと（けんかしてもいいということ）

- ・ミディエーター（仲介役）を探そう・なろう
- ・自分の意見を伝えること（言い方によって、相手にどう伝わるかに気付く）
- ・どのような表情で話せばいいのかな？（表情カードを使って）
- ・アイデアづくり（よりよい解決のための）

「怒り」に対処するためのワークシート（戸田有一訳「子どもをキレさせないおとなが逆ギレしない対処法」

北大路書房より引用）

- ・怒りの日誌
- ・怒りをどのように表現しているか？
- ・どんなことで「キレル」のか？
- ・出来事をどのようにとらえるのか？
- ・自分で使えそうな、平静を保つテクニック

指導のポイント

- ・誰もが「怒り」は持っているということ
- ・特定の考え方が怒りをもたらす

## 7 今後の課題

校内委員会を立ち上げるには、会議の時間の捻出が課題であるが、特別な教育的支援が必要な生徒の事例を学年会議で検討し、その後、職員会議で報告したり、検討したりすることが、校内委員会への立ち上げにつながるのではないだろうか。

また、毎週月曜日、放課後の学力を補充するため取組「きらめき教室」での個別指導を人権教育推進部と連携しながら行うなど、校内支援体制作りは一つ一つ前進していると思う。まだまだ始まったばかりの特別支援教育の取組ではあるが、確実に推進していきたいと考える。